

ちば しりつこなかだいほうこう  
千葉市立小中台中学校 2年 福与侑己

電気とぼくたちの生活

中2 福与 侑己

忘れもしない、東日本大震災があったあの  
年、ぼくはまだ小学2年生だった。地震が起こ  
つてからのある日、停震があった。計画停電  
だ。ムカいぼくがはしやぐと困るから、ママが  
話をしてくれただけけど、停電の前ぼくは、マ  
マの話を理解できないうちだけだった。い  
つも開けると明るい冷蔵庫も真っ暗で、体を  
温めてくれていた。たつとも少し温かいだけだ  
った。そして、なんと、言っても電灯がつか  
なくて暗かった。リビングの電灯は、つい最近  
とり替えたばかりで、消えてもホネホネくん  
のように緑色に発光するものだった。しかし、  
それも半分くらいで消えてしまった。なので、最  
後のたのみは懐中電灯だけだった。こたつも  
ストーブも使えず、ふたすら寒かった。パパ  
も真っ暗の中、おふろに入っていた。あたり  
前だと思っていたことができなくなつて初め

千葉県市立小中台ちばしりつこなかだいちゅうがう中学校2年 福与侑己ふくよゆうき

て電気の大切さに気づくことができた。たかが数時間なのに、電気が止まるととても不便だと思った。津波や原発のせいで家をなくした人たちが、どんなに不便でくるしい生活をおくっていたのかが、ほんの少しわかったよ。うな気がする。

今、生きているぼくたちは電気という大きな電気が、明るい生活をしていける。大昔は電気なんてなかった。太陽の光だけで生活していた時は、夜になるともう寝るしかなか

ったかもしれない。今、ぼくたちの生活には電気があるので夜おそくまでいろいろなことができる。自分はそのありがたさ、電気で何をしているだろう。テレビを見たり、ゲームをしたりして、夜遅くまで電気を使っている自分に気がついた。

よし勉強するぞ。ぼくはカチッと机の上のスタンドの電気をつけた。